
ボクの愛しい凛へ…。(ときの流れの中で…。スピン・オフ ワタルの気持ち)

alice

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ボクの愛しい凜へ…。(ときの流れの中で…。スピン・オフワタルの気持ち)

【Nコード】

N9979Z

【作者名】

alice

【あらすじ】

ミコちゃんシリーズで少し触れたワタル君と凜ちゃんのつながり。そしてワタル君が生まれ変わった凜ちゃんの運命を案じてその修正のためにかけた物語です。彼が生まれ変わっても妹のことを想っていた、ときの流れの連続性を描いていきます。

第一話 ボクと凧

ボクがまだ幼い頃、日本と中国との間に戦争が起こった。

この戦争はずいぶん長い間続いている。

そしてとうとう昭和16年にはアメリカまで敵にしまった。

最初の頃は日本が勝っている威勢のいい話を良く聞いていたけど、そのうちどうも様子がおかしいことを感じてきた。

毎日ラジオから流れてくるニュースでは、アメリカの軍艦を何隻沈めたとかそういうことを言ってるけど、そのわりにはアメリカの飛行機が日本本土にまでやってきてたびたび空襲がある。

怖い憲兵たちがいるからみんな何も言わないけど、うちのお父ちゃんやお母ちゃんや近所の金物屋のおじちゃんたちは「もうそろそろ危ないかも…。」なんて話をしている。

ボクはおぐら小倉 わたる渡。

渡という名前は両親が世界の国の人たちと心が渡り合える人間になっ
て欲しいと付けたそうだ。

そしてボクには2つ年下の妹がいる。

凧という名前で、女の子にしては少しヤンチャだけど、心が優しく
て可愛くて、ボクにとってはかけがえのない大切な妹だ。

日本人にしては少し茶色がかった亜麻色の髪の毛。

そしてクリッとした少し悪戯そうな大きな目。

彼女はボクが学校から帰ってくると

「ワタル兄ちゃん、遊ぼう！」
と言って待ち構えている。

「よし、じゃあ米突き100回ずつやったらカルタしようか。」
「ウン！」

この頃には日本の食糧事情はとても悪くなっていて、お店に行っても物が無い時代になっていた。

日常の食料のほとんどは配給制で、最初の頃はそれなりに食べられていたけど、そのうちさつま芋ではなくその茎だったり、砂糖がサツカリンという代用品に代わったり。

たまに米の配給があっても量はほんの少しでしかも玄米のまま。だからそれぞれの家では、この玄米をお酒の一升瓶に入れて突き精米する。

そして、こうして精米した米もそのまま炊くわけではなく、そのうちのほんの少しを鍋に入れて他の野菜でカサを増やし雑炊にして食べることになる。

ボクはともかく育ち盛りの凜にとってはとても辛いものだろうと思う。

1945年（昭和20年）が明けた頃。
巷ではある噂が流れ始めていた。

「どうも、そろそろ戦争が終わるらしい。」

どこが出元かわからない根拠のない噂だったけど、それはどこことなく不思議な信憑性を感じる話だった。

「もう海軍にはまともに戦える軍艦はないしなあ…。」

その姿を本当に見たことがあるわけではないけど、特攻隊と呼ばれる人たちがいて飛行機に乗ったまま爆弾を抱えて敵の軍艦に体当たりする人がいるらしい。

自分が必ず死ぬことがわかって出撃する。

なんて悲しいことなのだろう…。

ただ、大人たちはこんな話をするけど、ボくら子供たちは、日本には大和というものすごい戦艦がまだ残っているから絶対に負けないと信じきっていた。

それにしても最近では空襲が本当に多い。

前はたびたびやってくるくらいで、それでも工場とかが狙われることがほとんどだったけど、最近では街の中にまで爆弾を落としてくる。

先月の終わりには、うちから500mほど離れたところに爆弾が落ちて、20人くらいの人たちが亡くなったらしい。

そのため、ボクの家でも夜寝るときにはすぐに逃げられるように普段着を着たまま、防空頭巾とバッグを枕元に置いていた。

そして運命の3月10日はやってきた。

第二話 そのとき

3月9日

いつものように、ボクと凜は同じ部屋で枕を並べて眠りについてた。

今日は珍しくサイレンの音もならない。

街の中はシーンと静まり返り久しぶりの静かな夜だった。

真っ暗な部屋の中で眠くなるまでの間ボクと凜はしばらくこそそそと話をしていた。

「ネエ、ワタル兄ちゃんは戦争が終わったら何をしたい？」

「ウン、そうだなあ……。もし、できたら中学校に行けたらいいな。それで野球部に入るんだ。」

「そっかあ。ワタル兄ちゃん、野球上手だもんネ。」

戦前の日本でも野球はかなりメジャーなスポーツだった。

プロの野球チームも組織されて、沢村栄治とアメリカのベーブ・ルースとの試合は少年たちの野球への憧れを掻き立てた。

ただ戦争が激しくなってくると、元々アメリカから伝わってきた野球は敵性スポーツと見なされてしまい、子供たちもおおっぴらにキヤッチボールすらできなくなってくる。

「凜は何をしたい？」

「凜はねえ、お料理を習いたいなの？」

「料理？」

「ウン。それでね、いっぱい美味しいお料理を作ってワタル兄ちゃんやお父さんやお母さんにご馳走してあげるのー。」

「へえー。じゃあ、兄ちゃん、凧の作ってくれる料理の材料いっぱい買ってこなくちゃな。」

「ウン！ エットね、まず餡子でしょ、あとカステラとか…。」

「オイオイ、みんな甘いもんばかりじゃないか？（笑）」

「エヘヘー…。」

そんなとりとめのない話をしているうちにボクも凧も次第にウツラウツラとまぶたが重くなってくる。

そして

2人がすっかり夢の中の住人になってしまっていると

ウウウウー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！

ウウウウー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！

「空襲ー！ー！ー！ー！ー！ー！ 空襲ー！ー！ー！ー！ー！ー！」

けたたましいサイレン音と外の方で誰かが叫んでいる声が聞こえてきて、ボクはバツと飛び起きた。

「凧、起きろー。凧ー！ー！」

ボクは隣に寝る凧の身体を大きく揺すった。

「ウ…ン。どう…したのお？」

「空襲だ！目を覚ませー！」

窓から外を見るとすでに周りが炎で赤々と燃えているのがわかった。

するとそこに隣の部屋で寝ていたお母ちゃんが飛び込んできた。

「ワタル！凜！準備できてるかい！？」

「ま、まって。凜のくまちゃんも…。」

凜はいつも枕元に置いて一緒に寝ている手のひらほどのくまのぬいぐるみを探す。

「凜、早く！」

「ない、くまちゃん、どこいっちゃったの？ あ、あったー！ー！」

「さあ、早く！ お父ちゃん、2人とも準備いいわヨー！」

「ヨシッ！じゃあ逃げるぞー。」

そのときだった

パーーーーン！！！！

家の真上に大きな衝撃音を感じたと思ったら

ドーーーーン！！！！

いきなり家の天井がボクらの真上に落ちてきた。

そのときちょうどすでに開けてあった玄関に出る寸前まで来ていたボクと凜をお父ちゃんとお母ちゃんは勢いよく突き飛ばした。そのためボクと凜は家の外に転がるように弾き飛ばされた。

その瞬間

ボクらの家はグシャツと押しつぶされてしまった。

さらに潰れた家のそこかしこからすごい勢いで火の柱が吹き上がってくる。

そしてその炎の柱の間に家の壁に押しつぶされている母親の姿が見えた。

「お、お母ちゃん!!!!」

ボクと凧は母親の方に行こうとするが、火の勢いが強すぎて近寄れない。

「お母ちゃーーーーん!!!! お母ちゃーーーーん!!!!」

凧が泣き叫ぶ。

「ワタルーーーー! 凧を頼むヨーーーー! アンタが凧を守ってあげるんだヨーーーー!!!!」

母親は泣き叫んでボクにそう言った。

火は次第にボクらのほうにも近づいてきてあたり一面が紅蓮の炎に包まれていった。

「お母ちゃん!!!! お母ちゃん!!!!」

「凧、近寄ったらダメだ!!!!」

「いやだーーーー!!!! 凧はお母ちゃんと一緒にいるんだーーーー
!!!!!!」

そんな凧を見て母親は

「あっち行けーーーーっ!! あっち行けーーーーっ!!!!!!」
と狂ったように叫ぶ。

ボクは泣き叫ぶ凧を無理やり抱えて走った。

「離してえー！ー！！！！ 凧はここにいるー！ー！っ！！！！」

そして

随分走り息が切れてきた頃

「オイッ！ 小倉さんとこのワタルじゃないか！」

フツと振り返るとそれは近所の金物屋のおじさんの姿があった。

おじさんは凧を抱えたボクの姿を見るなり

「こっち来い！」

と言ってボクの手をひっぱり、そして近所の広場に作られた防空壕の中に飛び込んだ。

「はあ、はあ……」

ボクらは飛び込んだ壕の中にはすでに5人ほどの人がいた。

あまり見たこともない人たちだった。

「ずいぶんすごい空襲ですな。」

そのうちの一人の40代くらいの男の人が金物屋のおじさんに話しかけた。

「まったくだ。一体どうなってるのか……」

「アメリカがかなり近くまで来ているという噂を聞いてます。」

「ここだけじゃない。 どうも今回は東京中がやられているらしい。」

「それじゃ戦争に勝つかそういう問題じゃない！ このままでは日本が滅びるぞ！」

「シッ！！ 滅多なことを言いなさんな。どこで誰が聞いてるともわからない。」

「ワタル兄ちゃん…。怖いヨオ…。」

凧は熊のぬいぐるみを胸に当てながらボクに寄り添っている。

凧の持っている熊のぬいぐるみは、近所に住む久美子ちゃんというお姉ちゃんが作ってくれたものだった。彼女は渋谷の実際女学校に通う女子学生で、勤労奉仕でたまにお菓子などが手に入ると自分で食わずに凧に持ってきてくれたりと凧のことをとても可愛がっていた。

「大丈夫。もうすぐアメリカの飛行機は行っちゃうから。」

ボクは凧の身体を抱きしめてそう言った。

そのとき金物屋のおじさんが呟いた。

「何か息苦しいな。」

「あたり一面火の海ですからね。火が酸素を奪ってるんでしょう。」

そういう会話をしていると上空を飛ぶ爆撃機の音が遠ざかっていくのを感じた。

「どうやら去っていったようだな。」

ボクは

「チョット外の様子を見えます。」
と言って立ち上がった。

「ワタル兄ちゃん、行っちゃいやだー。ここに居て。」

「チョット見るだけだから。ここで待っててな？」

そしてボクは防空壕の中から恐る恐る頭を覗かせて地面の様子をうかがおうとした

そのとき

[illegible]

火の竜巻が防空壕のある広場一面を覆い

そしてその火の童卷はボクラのいる壕にも襲い掛かった。

「アツツ!!!」

その瞬間ボクの目の前からすべてが消え去った。

[illegible]

フツと気がつく、ボクは薄暗い森らしき場所に立っていた。

「アレ……。ここは？ た、助かったのか？ でも……」

周りを見回すと今まで一緒に居たはずの人たちは誰も居ない。

「凜ーーーーー！ 凜ーーーーー！」

ボクは凜の名前を大声で叫んだが何の反応もなかった。

シーンとした闇の中にはときどきカサカサという木の葉が風に擦れあう音が聞こえる。

するとどこか遠くの方で何やらボーっとした明かりが見えてきた。そこはどうやら森の奥の方で、時々暗くなったり、また明るくなったりと不安定な光のようだった。

ボクはとにかくその光を目指して歩き始めた。

随分長い間歩いたように感じた。

やっとその光の近くまで寄ったとき、それは一軒の古い日本家屋であることがわかった。

その家の玄関のところに辿り着くと、ボクは扉をドンドンと叩いた。「すみません。誰かいませんか？ すみませーーーーん！！！！」

誰も出てこない。

ボクは意を決してその家の中に入ってしまった。

すると

家の中には少し暗いながらもハッキリとした明かりが灯っていて、そして

玄関から一番近い部屋に入ると、その部屋の中央にあるお膳の上には真っ白い山盛りのご飯、温かそうな湯気のたった味噌汁、野菜と肉の筑前煮、魚の煮付けなどが並べられていた。

「な、なんだ？これ…。」

こんなご馳走を見たのはいつ以来だろう。
きつと戦争が始まる前。

まだ日本が平和で、人々の暮らしに笑いが溢れていたとき。

（ダメだ。もう我慢できない！！！！）

ボクは真っ白いご飯の入ったどんぶりを抱きしめるように抱えこんだ。

ああ、うまい！！！！

なんてうまいんだ！！！！

こんな美味しいものを凧にも食べさせてやりたかったな。

そうだ！ 半分残して凧を探して食べさせてやろう。

きつと喜ぶぞー！！！！

そう思いながらパクパクと食べていく。

さあ、これだけ食べたんだから残りは凧に…。

そう思ってお皿を見ると

「アレッ！！！！」

不思議なことにお皿の中もぜんぜん量が減っていない。

ボクがあれだけ食べたのに、食べる前と変わらない山盛り状態なのだ。

「なんで…。」

ボクはカチャッと箸を置いた。

そのとき

「もうお腹いっぱいになったかな？」

部屋の入口からいきなり男の人の声が聞こえた。

「エッッ！」

驚いて振り返ると、そこには中年風の随分高級そうな背広を身に付けメガネをかけた男の人が立っていた。

「あ、あ、あの…。すみません。勝手に…。」

ボクは勝手に入り込んでご飯を食べてしまったことを謝ろうとすると

その男の人はまったく気にしない様子で

「ハハハ、いいんだヨ。キミのために用意したものだしね。」と答えた。

「ボクのために用意？ エ、なんで？」

「キミがここに来ることはわかっていたからさ。」

「わかってたって？ あの、ここってどこなんですか？」

するとその男の人は部屋の中に入ってきて、そしてボクの座るお膳の前に腰を降ろした。

「ここは…生れ变りの森さ。」

「生れ変りって！！！じゃあ、ボクは死んだんですか？」

「まあ、そういうことだね。」

「そしてこの家は生れ变りのときまでキミが過す家。だからキミはこの家ものを何でも自由に使える。」

「あ、あの凜は？ 妹がいたんですけど。」

「ああ、いたね。」

「凜はどうなったんですか？　ここに居ないってことは助かったんですか？」

「いや、キミと同じときに彼女も死んだ。」

「で、でも、じゃあどこに？」

「彼女は『女の森』にいる。」

「女の森？」

「そうさ。そしてキミが今いるのは『男の森』だ。」

「それじゃ、ボクも凜もこれから生れ変わるんですか？」

「そうだ。それぞれ別々の人間にね。今度キミたちが生れ変わる世界は戦争のない平和な時代ヨ。」

「そ、そうですかー。」

「キミたちはしばらくの間それぞれの家で暮らし今までの人生を見つめなおす。そして『そのとき』がきたら忘却の風呂に入り今までの記憶をすべて洗い流し新しい人として生れ変わるんだ。」

「エ、じゃ、じゃあ、凜のことも忘れてしまうってことですか？」

「まあ、そういうことだね。」

「ボクは死んだお母ちゃんから凜のことを頼まれたんです。」

「しかしね、人というのは生れ変わるとき前世の記憶を引きずってしまうことは許されないんだ。どんな前世であってもそれを次ぎの来世で引きずってしまうと必ず不幸になってしまうからね。まあ、とにかくここはキミの家だ。時間はたっぷり、いや時間という観念はここにはないな。あるのは心だけだ。ゆっくり色々なことを考えたまえ。」

そう言ってその男の人は部屋を出て行った。

第三話 未来にあるもの

お腹はふくれた。

しかし部屋の中を見回しても何もない。

本もなければラジオもない。

だからやることが何もない。

そんなときフツと目に留まったのは部屋の片隅に置かれた大きな鏡台だった。

ボクはその鏡台に近づくところそこに映る自分の姿をじっと眺めた。

そういえばうちにもこんな鏡台があったな。

お母ちゃんがお嫁に来たときに持ってきたって言った。

よく凛がその鏡台でお母ちゃんが化粧するときの真似をしてたっけ。
凛のやつ、お母ちゃんの口紅を勝手につけてお化けみたいな顔になって、すごく怒られたっけ（笑）

そんなことを考えてクスツと笑いが漏れてしまった。

するとそのとき

その鏡の表面がボーッと歪み

今まで映っていた自分の顔が消えて、何かの画像らしきものが浮かび上がってきた。

（エ、なんだ？）

その画像は次第に輪郭を整え、そしてハッキリしたものになっていく。

まるで映画を見ているかのようにだった。

それは凜の姿だった。

凜は大きなお風呂の中に身体を沈め、そして湯船の中で数回身体を転がせているうちに彼女は次第に人間の姿から丸い球体のような光に変わっていった。

そしてその球体はその風呂場から飛び出してどこかへ飛んでいった。

そのとき

ボクの後ろの方で

「彼女は生れ変わったんだヨ。これで安心したろ？」
という声がした。

さっきの背広姿の男の人だった。

「日本は戦争に負けた。しかし日本人は勇気を持ってそこから新しいスタートを切った。その結果この国は世界でも非常に豊かで平和な国を築くことができた。彼女はそういう時代に生れ変わるんだ。」

「そうですか。よかった。本当によかった。」

「キミも同じ時代に生れ変わるはずだ。美しいものを素直に美しいと感じ、正しいと思うことをはつきり口に出して正しいといえる時代だ。よかったな。」

「ハイ、ありがとうございます。じゃあ、凜はこの時代で幸せになっ
ていくんですね？」

「キミはきつと幸せになれるヨ。」

「そうですか。それで、凜は？」

「生れ変った以上キミと彼女はもう赤の他人だ。キミがそれを気

にする必要はない。」

「ボクは凜のことを聞いてくんです！　ちゃんと答えてください！」
「……………」

「何か…あるんですね？」

「何かあるとしてもそれは彼女の問題だ。　生れ変わったキミにはす
でに関係がない。」

「嫌だ！！　ボクはお母ちゃんと約束したんだ。　凜の未来を教
えてください。」

すると、その背広の男は小さくため息をついてこう言った。
「ふう…。　どうなるものでもないのに。　それじゃ、その鏡を見
て、そして念じてみなさい。」

「念じる？」

「彼女の未来を見たいと念じるのだよ。　目を閉じて心から念じ、そ
してゆっくり目を開く。」

ボクは言われたとおり目を閉じて念じた。
そして恐る恐る目を開けると

凜は平成24年という時代の東京に小谷家の第一子として生を受け
る。

鏡には凜が生まれたときの病院の様子が映し出された。

「オギャァー！　オギャァー！」

「おおー、なんて元気そうな子じゃないか！」

ベッドの上には新しいお母さんらしき人が横たわり、優しい顔でそ

の赤ちゃんの顔を眺めている。

そして周りには新しいお父さんらしき人やおじいさん、おばあさんがその赤ちゃんの寝る小さなベッドを取り囲んでいる。

（よかった。）

（凜はこんな優しそうな人たちの子に生まれたんだ。）

「名前はどうかしら？」

お母さんがお父さんにそう尋ねた。

すると、お父さんは手に持ったカバンの中から一冊のノートを取り出した。

「フフフ、じつは色々考えたんだ。」

「あらあら、そんな専用のノートまで作っちゃって？」（笑）
お母さんは笑って言った。

「男の子と女の子の名前をそれぞれ考えたんだ。1週間考え抜いたんだぞー（笑）」

「ハイハイ（笑）」

「それじゃあ、発表します！ ジャジャーン！ この子の名前は『小谷 哲』、哲学の哲って書くんだ。」

そう言ってお父さんは名前の書いた紙を広げた。

（エ、哲って？ 男の名前？ なんで？）

ボクは背広の男に尋ねた。

「あの、凜は男に生れ変ったんですか？」

するとその男は少し戸惑うようなそぶりで応えた。

「いや、そういうわけではない…。」

「じゃあ、なんで？ 哲ってどう考えても女の子の名前じゃないですよね？」

「まあ、もう少し先を見てみたまえ。」

ボクは再び鏡の様子を見る。

凜の生れ变りの哲はその後すくすくと育っていく。

そして中学2年のとき、『そのとき』が来た。

彼にある日女性の生理が起こり、病院での検査で哲はじつは女性であることが判明する。

（そうか、そういうことなんだ。）

（それで女の子として幸せになていくんだな。）

そう思っていると画面はその先に進む。

哲は凜と名前を変えて、女性として生活をするようになった。

しかし、彼女はそれから次第に身体が女性の特徴を示すのに反して心がどうしても付いていけなかった。

ミコちゃんなどのせっかくできた女友達とも次第に違和感を持ち離れていく。

凜の両親はそんな彼女に女子の中で生活すればきつと自然に女性としての自分を受け入れていくだろうと考え高校で女子校に入れる。その中で彼女もかなり強引な努力をして自分を女の環境に合わせ去った。

高校を卒業した後、彼女は附属の女子大に入学する。

そしてそこを卒業した後24歳のとき親の勧めるお見合いである男性と結婚をする。

しかし心と身体の葛藤を続けていた彼女は女性としての結婚を自分の中で受け入れられなかった。

そうした中で彼女は妊娠をして女兒を出産する。

しかしそこでとうとう彼女の心は壊れてしまう。

男として生まれたはずの自分が実は女で、そして男と結婚して子供を産んでしまった。

流されようと努力したつもりが反対に彼女の心の中で消化されず溜まってしまった。

そして彼女は25歳のとき、自らで自らの命を絶つ。

（そ、そんな…。）

ボクは絶句した。

そんなボクの心を見透かすかのようにその男は

「つまり彼女は女性として生を受けるんだが、生まれたとき身体の局部が変形してしまい男性器と見間違われたため男児として育てられてしまうわけだ。彼女が悪いわけではない。しかしそれは運命であって仕方がない。」

ボクは立ち上がってその男に詰め寄った。

「仕方がないだって！？ ふざけるな！ ボクの妹を、ボクの妹を…。」

「もうキミの妹ではない。赤の他人だ。」
男は淡々とそう応える。

「たとい生れ違って他人になったって、凜はずっとボクの大切な妹だー！ー！」

「困ったな…。」

「お願いします！ 凜を生まれたときからちゃんと女としてー！ー。」

「それは無理だ。我々は現世での出来事に対し物理的な力を行使することは一切できない。」

「そんな…そんな…。」

ボクはその場にしゃがみこんで泣き出してしまった。

「物理的な力を行使することはできない。 が…しかし…。」

「しかし？ しかし、なんですか？」

「精神的な影響力を与えることはできなくはない。」

ボクはすくっと立ち上がった。

「そ、それはどういことですか！？」

「つまりだ、彼女がそういう方向に向かわないように、女性としての心呼び覚ましてやるというのかな…。」

「そのためにはどうすればいいのですか？」

「ひとつだけ方法があるが…。」

「教えてください！ なんでもしますから！」

「しかしな、これはキミにとってまさに修羅の道となる。せつかく生れ変わるキミにとって。」

「いいです！」

その男は少し考えた後おもむろに口を開いた。

「それじゃあ……。つまりキミが彼女の中の女性を覚醒させる役割を果たすってことだ。」

「どうやって？」

「キミは前世で12歳まで生きた。もしキミがこの役目を果たすなら彼女と同じ学年で12年間キミに前世の記憶と自我を持ったまま命をあげよう。ただし彼女の生理が起こるのは14歳のときだから、キミは10歳で一度死に、そして15歳から16歳の終わりまでの2年間は特別の実態を与える。それぞれの期間にできうることをやって彼女の心を矯正していくというわけだ。」

「それではお願いします！」

「しかしだ……。」

「为什么呢？」

「キミはこれによって生れ变りの順番を逃すことになる。こう言うってはなんだけど、今度キミが生れ変わる予定の家庭はとても良い家庭で両親も素晴らしい心を持っている。家も裕福だし、それにキミ自身も容姿も頭脳もかなり恵まれている。それを他の生れ变りの順番待ちに譲ることになるが。」

「いいです。譲ります。」

「本当にいいのか？」

「凜は大切なボクの妹です。」

そしてボクは特別に前世での記憶を持ったまま生まれ変わっていった。

鮎川 渡として。

第四話 運命の交差

ボクが生まれたのは鮎川家といって、大手の出版社に勤める父親と専業主婦の母親、そしてボクの3人家族だった。

父親は温厚な人で、仕事が忙しい中体調を見てボクを遊びに連れて行ってくれた。

母親もとても優しい人で、生まれつき体が弱いボクのために毎日体力のつく食事を作ってくれた。

タイプは少し違うけど、前世の家族とどこか共通したものを感じるそんな温かい家庭だった。

だから正直いえば何度か

（こんな優しい家族ならこのままずっと…。）

そういう気持ちさがフツと心をよぎったこともあった。

ただボクは生まれつき心臓が弱かった。

そのため幼稚園には行かず病院に通い、そして小学校に入学してもよく休みがちな生活だった。

そんなボクがようやく哲（凜）と交わることができたのは小学校2年生のとき

ボクは哲として生活していた凜と同じクラスになった。

驚いたことに哲（凜）は、前世で凜のことをよく可愛がってくれた近所の久美子ちゃんの生まれ変わり

と仲の良い幼馴染でいた。

小学校1年生のときは1週間のうち3日は病院通いで学校を休みがちなボクには2年生に上がっても仲の良い友達是谁もいなかった。当然同じクラスといっても哲（凜）や久美ちゃんと話したり仲良くすることは無い。

いつも一人ぼっち。

でもボクは遠くからでも凜の生まれ変わりの哲を見守っていくつもりだった。

しかしある日

ボクは偶然にも哲（凜）そして久美ちゃんと親しくなるきっかけを持った。

ボクらを繋いだのは、ボク達の家の近所にある小さな公園

そう、この公園はじつはボクらが死んだ『あの防空壕があった広場だった場所』。

戦後はこの一帯も少しずつ復興し、次第にまた多くの家々が建ち並び、そして広場だったこの場所は公園になった。

ボクは体の調子の良い時はしばしばこの公園を訪れては一人静かにブランコに座って漕いでいた。

ボクの記憶ではちょうどこのブランコの下に防空壕があったんだ。

1メートルほどの幅の入口で穴が5メートルほど下斜めに掘られて、あのときはそこに7人くらいの人がギューギューに肩を寄せ合って座っていた。

暑苦しくって、土の匂いとホコリだらけ
そんな場所でボクたちは全員竜火に焼かれて一瞬で死んでしまったんだ。

2年生の初め頃のある日曜日の午後
ボクはいつものようにこの公園にやって来た。

2つ並んだブランコのうちボクが乗るのはいつも決まって右側。

キーーーーー
キーーーーー

足を小さく揺らすと前後に揺れる赤いブランコ

でも、あの時代の面影はもう何もない。

今は誰にも傷つけられることのない平和な時代。

毎日空襲の心配をせずゆっくり寝られて、お腹いっぱい美味しい食べ物を食べられる。

家の下敷きになって死んでいった僕と凜のお父ちゃんとお母ちゃん。

2人ももしかしたらこの平和な時代のどこかに生まれ変わっているんだろうか。

お父ちゃん…。
お母ちゃん…。

今世の自分の両親は鮎川の父と母なのに
2人ともとても優しい親でボクのことを愛してくれているのに

前世の両親を思い出すとなぜか涙が自然に溢れてしまう。

「前世の記憶を持ったまま生まれ変わることは自分のために良いことではない。」
そう言ったあの死の森で出会った背広姿の男の言った言葉が思い出された。

するとそのとき

「ネエー……。」「

下を向いていたボクは突然かけられたその声にフッと顔を上げた。
ボクの前には哲（凜）と久美ちゃんの2人が立っていた。

（り、凜！！！！ 久美ちゃん！）

高まる心臓の鼓動を抑えながら

「エ、あの、なに？」
とボクは返事をした。

「あのさ、ブランコの順番待ってるんだけど。」
哲（凜）はぼっきらぼうにそう言った。

「あ、ああ、ゴメン。」
気がついたらボクは30分以上もここに座ってしまっていた。

ボクはブランコを降りて2人に譲る。

2人は仲良さそうに並んでそのブランコに座りキャッキヤと漕ぎ始めた。

「あ、あの…。」
ボクは意を決して哲（凜）に声をかけた。

「なに？」
哲（凜）は漕いでいたブランドを足で止めて、怪訝そうに僕の方を向いて応える。

「あの、小谷君と安藤さん…だよネ？」
「ウン、そうだけど。キミは誰だっけ？」

「あ、同じクラスの鮎川、鮎川 渡っていうんだ。」

すると哲（凜）と久美ちゃんはお互い顔を見合わせる。

「同じクラスに？ いたっけ？」

「あ、ボク、病気でよく学校休むから。」

「もしかしてアタシの席の2つ後ろの席にいる人？」
久美ちゃんがボクにそう尋ねる。

「ウン、そうそう。」

「そうなんだー。2年生になっていつもその席空いてるから誰かいるのかなあって思ってた。」

「なんだー。じゃあ、同じクラスじゃん！一緒に遊ぼうヨ。」
哲（凜）はボクにそう言ってくれた。

「い、いいの？」

「当たり前じゃん。ね？久美ちゃん。」

「ウン！一緒に遊ぼう。」

こうしてボクら3人はその日を一緒に過ごすことになった。

哲に生まれ変わった凜は言葉遣いや態度は男の子そのものだった。
ただ、体格は同年齢の男の子に比べて華奢で、身長も体型も久美ちゃんと同じくらい。

顔つきは男の子としては柔らかく中性的な感じで、あの時代と同じクリッとした悪戯そうな大きな目に亜麻色の髪の毛をしていた。

またこの頃から女の子特有の少し甘い体臭を出していた。

そしてその日からボクら3人は時々この公園で会って遊ぶようになった。

特に約束をして集まるわけではない。

ボクが2人が来るのをここで待っているのだ。

そして偶然に会ったように声をかけた。

ボクらのそんな関係は半年ほど続く。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9979z/>

ボクの愛しい凜へ…。（ときの流れの中で…。スピン・オフ ワタルの気持ち

2012年1月7日03時45分発行